

防衛大学校本科第27期学生及び理工学研究科第20期学生 卒業式における学校長式辞（昭和58年3月20日）

防衛大学校本科第27期及び理工学研究科第20期の学生諸君は、本日をもって所定の教育訓練並びに研究の全課程を終了し、4年あるいは2年の小原台生活に別れを告げるようになりました。ここに卒業式を挙行するに当たり、卒業生諸君に対し、まず心からお祝いを申し上げます。

本日のこの栄ある式典に、国务御多端の折柄、御臨席を賜りました中曾根内閣総理大臣^{注(1)}、谷川防衛庁長官^{注(2)}をはじめ、国会議員の諸先生ほか内外多数の来賓各位に対し、心から厚くお礼を申し上げます。また、卒業に至るまでの間、歴代の防衛関



第4代学校長 土田 國保

係機関の幹部各位、官民の諸機関、更には有志の皆様方、並びに在日米軍、各国大使館付武官の方々からいただきました御指導、御協力に対しましても、併せて厚くお礼を申し上げます次第であります。また、本校において学術教育の任に当たられました教授、助教授、講師、助手の各教官、日夜をわかつたひたむきに訓練補導に全力を傾注され、あるいはまた、縁の下の力持ちとなって各般の校務に精励せられた自衛官及び職員各位に対しましても、学校長として、この際改めて深甚なる感謝と敬意を表するものであります。更にはまた、遠路をも省みず御参列賜りました御父兄の皆様方に対しましても、今日までの御援助に深く感謝申し上げますとともに、ここに御子弟の成業を心からお祝い申し上げます次第であります。

393名の本科卒業生諸君、4年間の長かりし小原台生活も、かの道遥歌に唱われるごとく、まさに夢のごとく去って行ったという感慨を、熱くその胸に抱きしめていることでしょう。昭和54年春4月、折から

注(1) 中曾根康弘

注(2) 谷川和穂

の雨の中、桜花野山に勾うあの入校当時のことを、私も今改めて思い出しております。すなわち私が本校に着任したのは、その前年の秋でありました。私が初めて迎えた1年生が君たちであり、ともに丸々4年間を過ごしてきただけに感慨^{ひとしお}一入のものがあります。

1年生当時の諸君と今の諸君とは、私の目から見れば、まさに見違えるような逞しい成長ぶりであります。4年の歳月と、その間の学校内外のあらゆる体験、各年次ごとに設定された学業・訓練、そして校友会活動等の幾多のハードルを乗り越えてきたその試練、今や胸を張って堂々と卒業してゆく資格は、諸君のものであります。

シンガポール共和国、タイ王国の4人の卒業生の諸君も、今後一層の御健闘を祈ります。

諸君の防大生活を通じて、常日頃諸君に要望してきたこと、すなわち、真の紳士にして真の武人たれ、己れの名利、栄達、富貴の如きは二の次にして、身を挺してこの尊い祖国日本を護らんとする愚直な根性を磨け、そして併せてその根性を土台として、機略縦横の万能選手たれ、学問に対する尊敬と憧れを忘れるな、真の国際人たれ、小さな完成品たるより大いなる未完成品たれ等々は、改めてここに繰り返す必要はないかもしれません。しかし、諸君、理想の防大生像が実るか否かは、むしろこれからなのであることを、決して忘れないで欲しいのであります。

諸君はこれから、陸・海・空幹部候補生学校の課程を経て、我が国の現役幹部として、重要かつ責任の重い防衛の第一線に展開してゆくのであります。

「人生の価値は、その長さに非ずして、その用い方にある。ある人は長く生きはしたが、殆んど生きなかった。生きるとは燃えることである。死は燃えつきた時に、静かに訪ずれる安らぎである」と16世紀のフランスのモラリストであるモンテーニュは述べております。

防大4年の歳月を通して培ってきたこの若い力を、何卒惜しみなく發揮されて、祖国日本を支える大事な^{てこ}挺子として、燃えてゆかれんことを心から祈念してやみません。

次に、理工学研究科60名の卒業生諸君に対し、一言申し述べます。諸君は、幹部自衛官として必要な資質の涵養、なканずくそれぞれの分野における高度の専門的知識技能を修得すべく、2年の歳月を本校において過ごされたのであります。幹部自衛官としての諸君の同僚の多くは、それぞれ多忙な第一線勤務に挺身されているわけではありますが、大学を卒業して数年を経てから、諸君のようにいま一度研学の門をくぐって自

己をみつめ、大学時代の基礎を改めて自分のものとし、その上に立ってそれぞれの専攻を通じて頭脳の充電を図り、新規導入の大型コンピューターを駆使することにより、将来の飛躍と大成のポテンシャルを培う機会を得られたことは、真に有意義であり、2年間の第一線勤務の空白を補ってあまりあるものと考えるのであります。

今や正面装備の充実と併行して、我が国防衛におけるソフトの分野、防衛に関する技術の発展向上は、声を大にして叫ぶべき時機にあると考えております。諸君も、それぞれの新任務に挺身せられるとともに、今後とも更に研鑽に努められ、自衛隊の科学技術の発展向上に尽力されんことを切望するものであります。

さて卒業生諸君、汗と涙の思い出の小原台生活の幕は、今まさに閉じんとしつつあります。これから先、同期生同志、その融和と団結を更に強め、国内外のいかなる部署、そしていかなる境涯にあっても、防大出身者としての誇りをもって、お互いに手を取り合い助け合いつつ、末永く祖国日本の輝かしい将来のために挺身してゆかれんことを、お別れに当たり、心から祈念してやみません。

重ねて諸君の健康と健闘を祈りつつ、ここに式辞を終わるものであります。